として用いていなかったなら、それらは鋭さを失くしたことだろう。また、それらはあの2人の戦友のものでもない。これら詩詞は、革命群衆の手を経て集団創作されたのである。」「何組かの清明詩抄（手写本を指す）中の詩は、大部分がすでに『革命詩抄』集の中に収められている。しかし、そのことは少しも手写本の意義を減退させることはないのだ」と。

（すぎやま・なこ）

柳青とリンゴ
― 柳青再評価をめぐって

加藤三由紀

柳青に〈建議改変陝北的土地経営方針〉という文書がある。あらましを紹介しよう。

10年のうち9年は旱魃。耕地は段段畑式で細分されている、という陝北地区は、毛沢東の語る"水利は農業の命脈である""農業の出路は機械化にある"という二つの根本的条件からすれば、完全に失格である。では、どうすればよいのか？陝北地区の気候・土壌・地形は、理想的なリンゴの産地なのである。冬季は−20℃の厳寒にみまわれ害虫の比記が少ないから農薬代を節約できる、この点は現生産地の欧東遼東遼西にも優っている。しかも国土保全に役立つ。傾斜地にリンゴ、風の強い山の背に桑、平地には穀物を植える。地方都市に製紙（桑の枯枝を利用してリンゴのパッケージにする）・リンゴ酒醸成・かんづめ・紡織等の工業を興す。エネルギー源には黄河を利用した水力発電を活用、更に地下資源も開発できる。成否のカギは鉄道運輸である。これは陝北の土地経営の進展に沿って計画的に整備していく。そうすれば不足分の穀物（⅓は自給できる①）を陝北市場に入荷しやすくなるし、園芸作物・生糸製品を港（天津）へ最短距離で運輸することができる。"穀物を要（カナメ）にする"とは言っても、一地区のみで自給自足を図らねばならないというのではない。封建制における停滞を終結させ小土地所有制を消滅させた以上、社会主義的計画経済のもとに、各地の地理的条件を活用できるのである。

この建議文は1955年、中共陝西省委第一書記に提出されたが、一読もされずに省委農

村工作部へまわされた。以後、習俗はしたものの、原稿も長われ沙汰やみになっていたが、1972年病床で思想審査を受けながら、陝北地区の農業が急務に喚しているとき、再び筆を取ったという。1979年2月1日の《人民日報》で大々的に公開された。『柳青小説散文集』('79・7)『柳青書簡』('82・3)に収められているのは当然のこととして、『中国農業発展問題討論集』('82・4)にも重大林博の論文とともに採用されている。これには更に柳青の建議書に続けてく対西北地区発展果樹生産的意見>(孫華)が載っており、柳青の雄大な構想を補うかのように、農業地理・農業技術・栄養学等の立場から、中国における果実の重要性を指摘している。強行な耕地面積拡大政策が自然状況を悪化させ(解放区時代柳青が工作員として赴いた米脂県も過度の開墾により生産力低下をおこすようになった)、実用に不向きな大型農業用機械機動の多くが無駄になっていることが明らかになり、改めて国土保全の為の山林・草原の有効な利用法が課題となっている現在、柳青が半世紀以上前に提出した構想は輝きを放っている。

一方、代表作の《創業史》はその改(1977年版における劉少奇批判の挿入)をめぐって論議の的となった。政策の図解に堕する文学への反省から文学の政治からの独立を叫ぶ文芸界全体の動きに対応し、"雰囲政治盡些"(孫犁の語を応用)という教訓を引き出しているものまである。[3] 柳青は『文芸講話』以上に『湖南農民運動考察報告』から影響を受けており、《創業史》はその名の通り、目の前の現実を描写するために書かれる、現実の先を行くものというよりは、軌跡をたどって構築された世界である。目前の農業政策に関しては、時々地方新聞に意見を提出したというが、[5] 文学を現実を動かすための直接の手段にすることは少なく、《耕畜飼養管理三字経》(1963年)が数少ない例外と言えよう。雄大なリンゴ生産設計図も《創業史》には反映されていない。舞台となっている長安県皇甫村は陝西省の中では穀物生産地として水利・土壌の条件に恵まれていることがその最大の理由であろうが、

そこには現実の先を行くよりは歴史を描こうとする柳青の文学に対する態度も影響しているように思われる。

作中に登場する果物の主なものは梨で、柳青自身も家の前庭に自ら梨と棗の木を植え、リンゴは豆・南瓜とともに菜園に植えられていたという[4]。1967年、強制的に皇甫村から連れ去られて後、これらは荒れ果て、梁生宝のモデル王家斌も失脚（大躍進期にも"浮夸风"に反対して失脚している[5]）、皇甫村勝利大隊第一生産隊は以後1982年になっても食料不足状態から脱していない。1983年からは人々の要求をくみあげる形で皇甫村も生産責任制をとりいれたという[6]。

一地域一産業の枠を越える目は直接農民から生まれるものではないと語り、陝北地区全体の産業構造についての個性的な青写真を作ったこと、その青写真には言及することなく実体験を通して農民と党の指導との関係を小説の形で歴史的に再構成したこと、にもかかわらず死の床にあって現実感を伴わぬ劉少奇批判を墓生の作《創業史》にくみこんだこと、一個の人間のこれだけの営為を総体としてどう評価していくかは、建国後の中国文学が生み出した創作・家生活・政治思想の連環の独特なあり方の意味を問いなおすことでもあろう。

〈注〉

① 陝北地区の½が"缺糧区"。陝西省の"余糧区"は関中平原・漢中盆地に限られている。（拙『中国農業地理総論』1981年科学出版社）

② 〈柳青的教訓〉王慧騏・王東明《汾水》1980年8期

③ 〈読柳青編《耕畜飼養管理三字経》有感〉胡采《延河》1963年2期

④ 〈回憶在皇甫村的日子〉陽友《人民日報》1978年7月20日

⑤ 〈重逢皇甫——懷念敬愛的爸爸柳青〉劉長風・劉可風・劉晓岡《当代》1979年2期

⑥ 〈《創業史》写作基地為何由富変窮？〉〈満腔熱情地扶持窮困社隊〉《人民日報》1982年5月18日

※③～⑤は『柳青事業』所収による。